

回教の經濟倫理

ヨハネス・クラウス著

明治書房刊

昭和十九年二月六日印
昭和十九年二月十一日發
行 刷

承認番號
い140253
2000部

四款の經濟倫理 ⑤ 定價 參圓
特別行爲 拾錢
稅相當額 合計 參圓 拾錢

著者 ヨハネス・クラウス、

發行者 高 村 鍵 造
東京都田區駿河臺二ノ四

印刷者 綾 部 喜 久 二
東京都田區小川町一ノ二

發行所 東京都神田區駿河臺二ノ四
明 治 書 房
電話神田(〇二五)四四二六
板巻東京七〇五九二
會田番號一三四五〇一

配給所

日本出版配給株式會社
東京都神田區淡路町二ノ九

序 言

宗教・社會・經濟間の關係の研究は、マックス・ウェーバー、エルンスト・トレルチ、マックス・シェラー、ウィルヘルム・シュミット、ウィルヘルム・コッペルス、アルフレッド・リュール、オトマル・シュパンなどの宗教社會學的研究が、これら三者の相互關係の検討に先鞭をつけるまでは、長年打ちすてであつた問題である。しかしこの研究は今尙ほ初期の状態を脱せず、今日まで、宗教と經濟乃至社會との關係の全體をうかゞはせる、信頼すべき詳論が缺けてゐる。この準備的研究は、骨の折れる仕事で、個々の宗教——キリスト教、佛教、回教、儒教など——の經濟生活に及ぼす影響をしらべねばならず、又正當な判斷を得るためには、これら的大宗教を歴史的に生み出したところの社會的經濟的環境をも看過してはならない。宗教的力に起因するとされる多くの社

會經濟現象も、屢々、相互作用に於いて一面、宗教形態の發達過程に影響を與へると共に、他面宗教的理念により制約規定された既存の社會經濟關係の變化にすぎぬ場合がある。この點で全體の均衡を失はないことは個々の研究家には殆ど不可能な仕事であつて、たゞその研究家が一人で、宗教學者、神學者、經濟學者、社會學者を兼ね、且つ歴史的關聯に深い洞察力をもつてゐる場合にのみ、或る程度成功し得るわけである。この仕事の達成は、回教に於いては殊に困難であるが、それは、回教研究が比較的少いアラビア語原典を傳へるにとゞまり、又社會經濟的問題より、むしろ純粹の神學的、文學的、哲學的、言語學的問題を扱つてゐるからである。又純回教思想と回教の中にはいりこんだキリスト教及びユダヤ教思想との區別も、從來殆ど説明されてゐない大困難を供する。マホメット時代の簡單な回教と、今日多様な中にも統一體として我々の眼に映ずる現在の回教の複雑な形態との間には大きな發展の跡が横たはつてゐる。この發展の過程に於いても、回教は主としてキリスト教から大きな影響を蒙つてきたが、既にその前に、マホメットの精神生活にキリスト教思想が働きかけてゐる。

Q. H. Becker の論文「Christentum und Islam——Islamstudien, I. Bd., Leipzig 1924 三八六頁以下參照）殊に古代末期の東方とヘレニズムとの混合的文化がキリスト教の外衣をまとうて、回教に影響を及ぼしたのである。

原始回教は簡潔な決戰態勢でアラビア人の支配と、神とマホメットの豫言者的使命との一致の承認を意味してゐたがそれがすべてであつた。しかるにそののち數世紀を経ざる中に回教は一大宗教思想にまで發展し、その中にはギリシア哲學やローマ法も混ぜられ、生活の全領域の偶々まで規定する倫理體系を含み、又キリスト教道德論と歸を一にする義務觀、キリスト教的理論及び實踐に基づける禁欲主義と神祕思想、キリスト教的思辨の影響をうけた教義論、キリスト教の聖人崇敬に似た聖者やその聖遺物の崇敬をも含むものとなつた。殊に國家・社會・經濟・道德に於けるキリスト教の影響は顯著である。そこでは到る所で七・八世紀頃東方に存したキリスト教的世界觀の感化のあとが見られる。ベッカー(O. H. Becker)、エルトチーエル(J. Goldziher)、フェルフロニユ(S. Frunze)などの指摘してゐるやうに、回教道德の全體は強いキリス

ト教の影響を蒙つてゐる。東方古代のヘレニズムがキリスト教に影響を及ぼしたやうに、それから數世紀足らずで東方的キリスト教的ヘレニズムが回教に影響したのである。アラビア人は、國家組織、經濟生活、物質文明の領域に於いて東ローマ及びペルシアの慣行を繼承し、かうして古代末期の東方的キリスト教的環境を土臺にしたわけである。アラビア人の占據や、既存の文化・經濟・行政の掌握は、それまでの事態を全然覆すことなくして行はれたのである。

後述する如く、經濟の領域に於いても、驚くべきほどの考へ方の相似が認められるが、之も共通の土臺からして説明さるべきものである。たと回教に於いては一般的にいつて、比較的に非宗教的なアラビアの原始的思想のために、東方的キリスト教や、トマス・アキナスの中世的キリスト教に於けるよりも、世界否定的經濟制限的傾向に對する反動は一層強く現はれてゐるが、この兩宗教の根本的態度は大體同様であると云へる。經濟精神の主要活動はそのいづれに於いても、主として農業に於いて行はれ、従つて兩者の經濟觀は相似た「中世的」様相を示してゐる。回教學者によつて、マホ

メットの言葉として示され、又社會・經濟生活に決定的な影響を及ぼした回教の傳統も、多分にその當時の東方的キリスト教的文化の思想をとり入れてゐる。又ローマ法も、ユスティニアヌス法典の形に於いてではないが、シリア的ローマ的法典の如き教會法典據を仲介として回教にはいつていつた。特にギリシア思想は、キリスト教的環境を通じて回教文化に入りこみ、のちに我々の眼前に展開したやうな巨大な文化世界を形成したのである。回教哲學は全體として、中世キリスト教的スコラ學と同じく、古代末期のキリスト教に立脚してゐる。それ故、根本態度や、いな道德的原理の相似・平行が認められるのも敢て怪しむに足りないのである。回教學の現状はなほ未熟を免れないから、原始回教の世界、典型的なアラビア的要素を現代の複雑な回教文化から窺知しうるまでに至つてゐない。従つて回教の經濟倫理を求めるにも、この複雑な全體にぶつかつていかねばならず、まだアラビア的要素とキリスト教的ヘレニズム的要素との相互作用を十分分析的に研究するほどになつてゐない。しかし宗教社會學は、社會・經濟現象を、一定の文化圈に組み入れるに先だつて、充分慎重をきはめねばな

らぬ。本書は重點を精神態度、經濟倫理の態度におくものではあるが、しかし社會的歴史的背景にも十分注目し、特に回教文化圏の經濟制度に相當徹底的に論及せねばならない。理想的要因と現實的要因とは、經濟生活に於いて不可分な密接な關係にある。回教と經濟と社會との相互關係を扱ふ本書の如き具體的敍説は、宗教や文化を、經濟技術・經濟組織の機能として説明せんとする一面的技巧的な唯物史觀の上層建築論とは正反對の立場にある。ことはさう簡單にはいかないのである。唯物史觀は、理念・知性ないデオロギーさへの、社會經濟の現實に及ぼす頗る明かな作用をも見落してゐる。この相互作用は、本書に於いて明かにされるであらう。

本書の翻譯は小林珍雄教授を煩はした。「回教の社會學」は清水幾太郎教授の譯されたものである。又、東亞經濟調查局の八木龜太郎氏は専門家の立場から本書中のアラビア語を懇切に訂正して下さつた。茲に衷心から感謝の意を表する。

昭和十八年六月

上智大學に於いて

ヨハネス・クラウス

アラビア語索引

*記號を附したる數は大川周明著「回教概論」(隱應書房刊行)の頁數なり。アラビア語の譯語は同書に負ふところ多し。

素

引

A

ṣadāt (フ-ダ-ト) 19. #257.

ansār (アンサール) 76. 229.

*184.

 ϵ_{aql} (アクル) 10.

D

dahur (ダフル) 23.

da'ia (ダ イ ハ) 158.

divāṭ (𐎡𐎴𐎧𐎠𐎹) 158.

dimmi (ジンミ-) 40. #222.

duar (ドゥアル) 152.

F

farīzu (フリ ← 𐎱𐎠𐎼𐎿) 141.

file (ファイル) 8.

figh (フイグフ) 13.

H

hadīt (ハデ₄ー_ス) 7. 頻出
246 *94. *96.

hājī (ハヂー) 55.

hajji (ハジジ) 126, 235, 167.

hamara (ハマラ) 46.

hamr (ハムル) 46.

harāj (ハラージュ) 39, 41, #222.

Liba* (ヒバ) 66.

hīṣā (ヒ一シヤ) 62.

hudūd (7 1° - 1°) 44.

I

jīmā* (イジマー) 8. 174. *228.

ijtihad (استقلال) 14.

16. 182. 251.

iktisāb (イク・サ・サーブ) 66.

Imām (イマム) 180. *184.

*191.

iqta'at (イクターアト) 157.

J

jihād (ジハード) 127, 234 #114.

jizya (ジズヤ) 39. 41. 129. *222.

K

kismet (キスマット) 248.

M

mauna (マウナ) 152.

mahājirūn (ムハジールーン) 230.

Mujtahidūn (ムジタヒドーン)

§. 13.

muqta' (ムクタフ) 160.

N

案 niṣāb (=サーブ) 134.

Q

引 qādi (カーディー) 63.
qaul (カウル) 8.
al qurʿān (アルクルアーン)
7. 頻出.

R

rubʿ (ラバー) 93.
Ramādān (ラマザン)
54. 239.
ra'y (ラアイ) 11.
ribaʿ (リバー) 16. 93. 251.

S

ṣalāt (サラート) 126. 239. *140.
ṣaum (サウム) 126. *163
Sariḥ (シリーア) 6. 206.
頻出. *8. 112.
ṣukūt (スクート) 9.
suṣna (スンナ) 7. 175. 182. *94.
*98.
sūra (スーラ) 7.

T

二 taqlīd (タクリーフ) 14. 16. 182.

U

Ulemā (ウレマー) 10. 13. 172.
191. 197.
uṣr (ウシュル) 130. 138.
ʿumma (ウンマ) 231.

W

walīma (ワリーマ) 155.
waqf (ワクフ) 70. 73. 153. 166.
wirāsa (ワラーサ) 66.

Z

zakāt (ザカート) 39. 41. 125.
頻出. *156.

目次

序言

總論

第一章 シャリーア (Shari'ah)

—— 回教法とその法源 六

第二章 回教の宗教的生活秩序に於ける經濟の位置

(イ) 經濟精神 三

(ロ) 飲食物に關する宗教的規定の經濟的意義 四

(ハ) 同胞教團 五

(ニ) 回教の組合制度 六

第三章

個々の特殊な經濟的制度和回教

(イ)	私有財産	五
(ロ)	相続法	五
(ハ)	負債	六
(ニ)	商業	六
(ホ)	利子問題	七
(ヘ)	高利貸法制 (リバー)	七
(ニ)	リバー理論の現代實踐への適應	七
(ハ)	回教とスエーデン哲學との高利論の比較	七
(ヘ)	税制——損課	五
(ト)	回教諸國に於ける封建制度	五
	回教と近代ヨーロッパ文化との關係	五
(イ)	反動的態度	三

(ロ) ヨーロッパの精神世界への順應を

目標とする回教の進展 一八

(ハ) 回教拔きのヨーロッパ化 一八

文献 二〇

附録 回教の社會學

序論 二四

一 回教の共同社會力 二三

二 共通の慣習と共教の宗教行爲 二六

アラビア語索引

回教の經濟倫理



總論 回教の經濟倫理

國民經濟學に於いては、この數十年來、抑々經濟學の範圍内に「經濟倫理の問題」の成立する餘地があるかどうかについて論争してゐる。ゾムバート（Werner Sombart）は、學問的論文に於ける價值判斷は、彼に「豌豆スープの中の小石」のやうに感ぜられたといふ、強い言葉をさへ用ひてゐる。所謂「純粹經濟學」の代表者達は、「經濟の自律」といふことを過度に強調し、倫理的な考へは、經濟學の自律性と相容れないものとして、之を却けたのである。

しかし歴史學派に至れば、既にその誤りをみとめ、況んや中世スコラ學の見解から大きな影響をうけたロマン派は、かく生活全體から經濟を隔離することは、正當でなく又學問的にもゆるし難いものであると考へた。

アリストテレスに基き、トマス・アクィナスによつて統一的な明確な體系に構成され、そ

の後の思想家達によつて完成された「久遠の哲學」(philosophia perennis)としてのスコラ學は、常に、當爲は存在の中に根柢をおき、倫理と經濟とは互に他を排斥するものではなく、むしろ不可分に結び合はされてゐるものであるといふことを主張してきた。經濟は經濟構成體の中で營まれるのであり、之は經濟が經濟理念に向けられ、統一的な經濟倫理によつて支へられる限りに於いてのみ永續することができるのである。この經濟倫理そのものは、先づ第一に、經濟の事實からその當爲として讀みとられてくる經濟理念によつて規整されるものであるが、その特別の色彩を、文化的・宗教的・世界觀的・民族的事實から得てくるのである。

經濟倫理はその折々の經濟構成體にその特徴を刻みつける。經濟活動の色々な型は經濟の本質から説明されるといふより、むしろこの經濟倫理を形造るところの文化的・宗教的・民族的、其の他の世界觀的影響からして説明されるものである。マックス・ウェーバー(Max Weber)の主な功績は、彼がその含蓄に富んだ社會學的諸研究に於いて、宗教・倫理的要素と種々な經濟の型との間の關聯を明かにした點にあるのである。之はこの方面に於ける先驅的な業績であつて、ウェーバーの歿後も多く之に附加されるところはなしにおかれてゐるものである。彼は回教についても、この種の研究の準備をしてゐたが、之を果し得なかつたことは遺憾と